

わたしは、時折、書を書く。先日も伊万里の知人へ送る書を書いた。「賑」「地力」「情」といった文字を色紙に書く。書には「無一物処即無尽藏」を好んで書く。「長崎の鐘」の作者永井隆博士に京都大の恩師が送ったといわれ、普通の人には見えないらしい。わたしは全共闘世代である。

う職業が理解し難いらしい。昼間っから家や外でチワワのナちゃんを抱いて、ぶらぶらしているわけだから堅気には見えな

い。新聞の文化欄に写真入りで掲載されたりすると、ますます普通の人には見えないらしい。地で雪かきをしている人がい

## 書を贈る是か非か

く。わたしの造語である。大島にも書は差し上げたつもりではあるが、残っているかどうか。

そんなわたしに興味を示してくる。「よかったら飲みませんか」と誘ったのが始まりであった。誘いには「待ってました」であった。

ある市役所の人からわたしの書が欲しいといった。「いいけど表装はそちらでするんだよ」というと「表装するには幾らぐらいかかるんですか」と聞く。

わたしの近所付き合いがないう。もう、向ヶ丘遊園に引越して来て40年になるが、まったくといっていいほど近所付き合いがない。近所の人も劇作家とい

ある。ノリマサと読む。長男の大吾と山本さんのご子息一雄くんが近所の道場で剣道をやってた。つまり、わたしの職業に興味を示す職業だったのである。

「さあ、8千円から1万円はするんじゃないの」というと「そんなら、表装してからもらえますか」としらつと聞いた。このタイプはわたしの脚本のモデルになる。その人とは音信不通

「大島を訪ねなければ訪ねなければ」と思いながら今日に至っている。松浦の同級生の吉本務さんをお願いして大島へ渡れないものか。「大島までもや」といながらも渡ってくれるはずである。だけど、戻り船は切

酔っぱらっては山本さんのお宅にもおじゃました。襖いっ

ばいに「無一物処即無尽藏」や「一夢一徹」を書き殴った記憶がある。「あの襖はどうしました」「張り替えました。でも書は取ってあります」。悪いことをした。書は贈呈していいものか悪いものか、いつも考える。